

「令和7年度 全国学力・学習状況調査」



赤磐市の状況

令和7年8月 赤磐市教育委員会

令和7年4月17日(木)に、全国学力・学習状況調査が実施されました。(結果の通知は7月中旬に行われました。)

赤磐市の結果とその分析、今後の取組の方向性についてお知らせします。

全国学力・学習状況調査（文部科学省実施の全国調査）について

<目的>

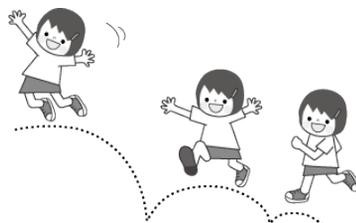
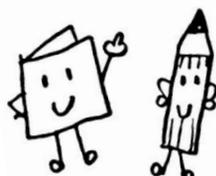
- 全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- 学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

<調査の内容>

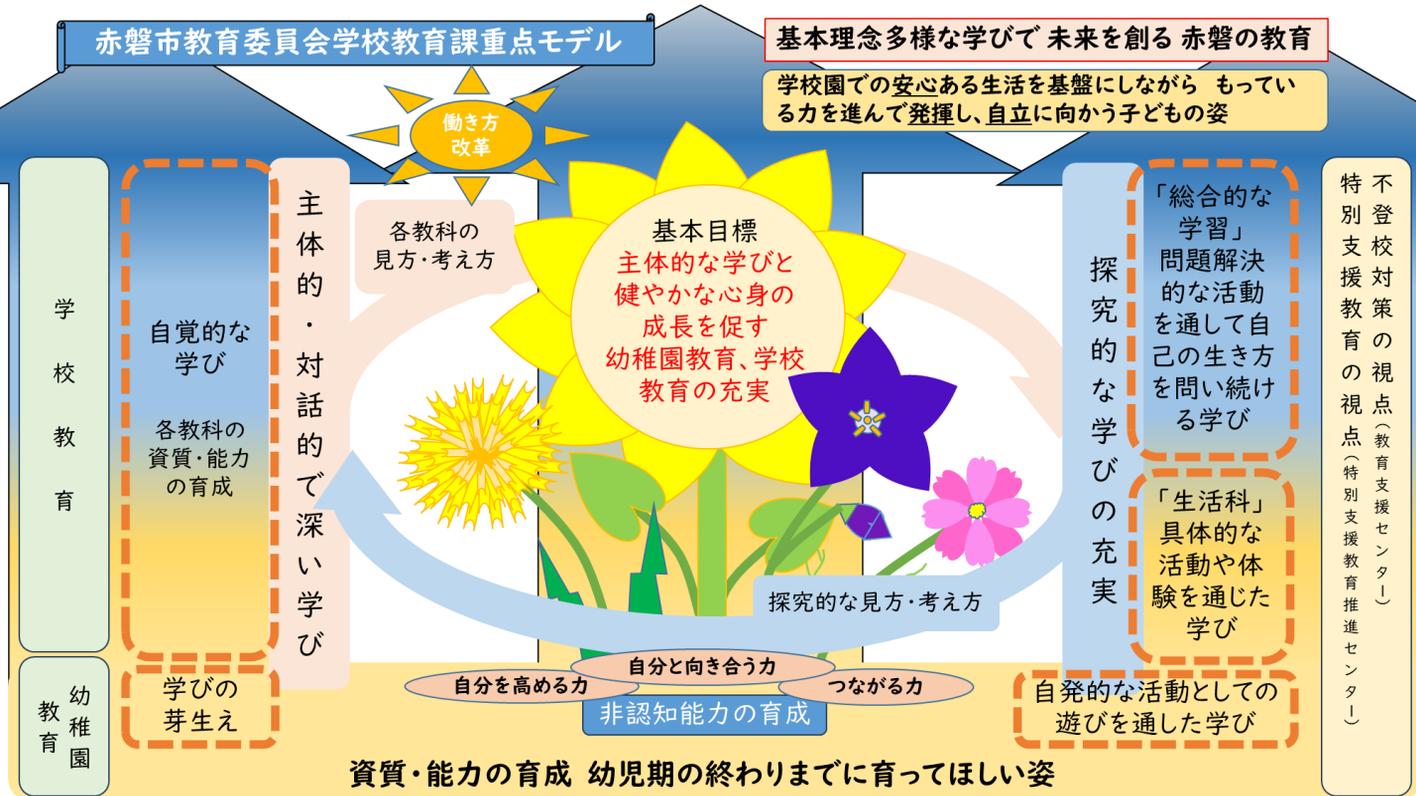
- 児童生徒に対する調査
 - ・教科については、国語、算数・数学、理科の3教科について実施
 - ・学習意欲、学習方法、学習環境等に関する質問紙調査
 - ・学習指導要領に示された目標や内容に基づき、調査対象の前学年までの学習内容が出題範囲
- 学校に対する質問紙調査

<調査対象>

- 対象者は、小学校6年生、中学校3年生の生徒
(赤磐市内参加者：小学校6年生 約390名、中学校3年生 約380名)



赤磐市教育委員会では、「赤磐市教育委員会学校教育課重点モデル」(下図)に示しているとおおり、幼児教育から中学校まで、途切れることのない連続した学びの接続が重要だと考えています。さらに、学校園での安心を基盤に自分の力を発揮することが学力の向上や、自立に向かおうとする児童生徒の姿に繋がるものと考えています。そこで、本調査では、教科の学力状況の他、児童生徒質問紙から見ることのできる児童生徒の様子についても考察を行います。



赤磐市 教育振興基本計画 基本理念
「多様な学びで未来を創る赤磐の教育」

基本目標
「主体的な学びと健やかな心身の成長を促す 幼稚園教育、学校教育の充実」

学校教育課では、「主体的に学びに向かい、身に付けた資質・能力をもとに、ともに伸びようとする子どもの姿」を目指して、子どもたち一人一人の多様性を大切にされた教育を進めていきます。

子どもたちは、安心ある環境の中でこそ、自分自身を発揮させることができ、幼児期からの非認知能力(「自分を高める力」「自分と向き合う力」「つながる力」)の育成を土台に、多様な学びを通して一人一人の花を咲かせ、自立に向かうものと考えます。

各教科で身に付けた「資質・能力」と、探究的な学習で身に付けた「学び方」を相互につなげることで、さらに主体的・対話的で深い学びの実現につながり、子どもたち一人一人の確かな学力の獲得へつながります。また、同時に個に応じた支援(特別支援教育の視点)や誰一人取り残さない学び(不登校対策)に丁寧に取り組んでいきます。

子どもたち一人一人がもともと持っている「伸びよう」「なりたい」という思いや願いを大切にしながら、これからの予測不能な社会の中において、たくましく生きるための確かな学力と、自ら学ぼうとする意欲を育てていきます。

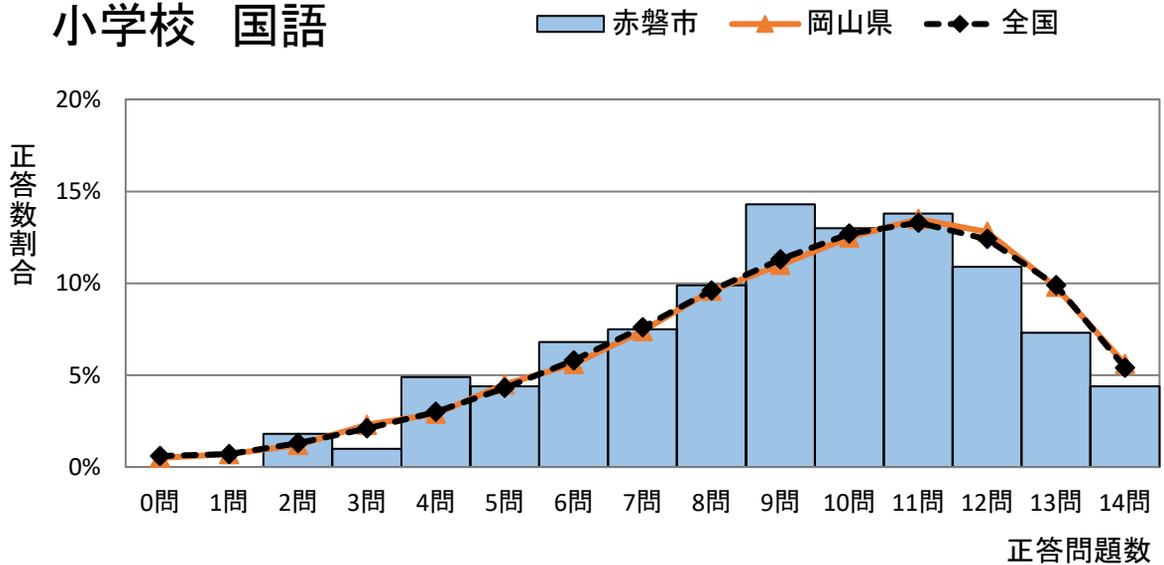


赤磐市 全国学力・学習状況調査の結果

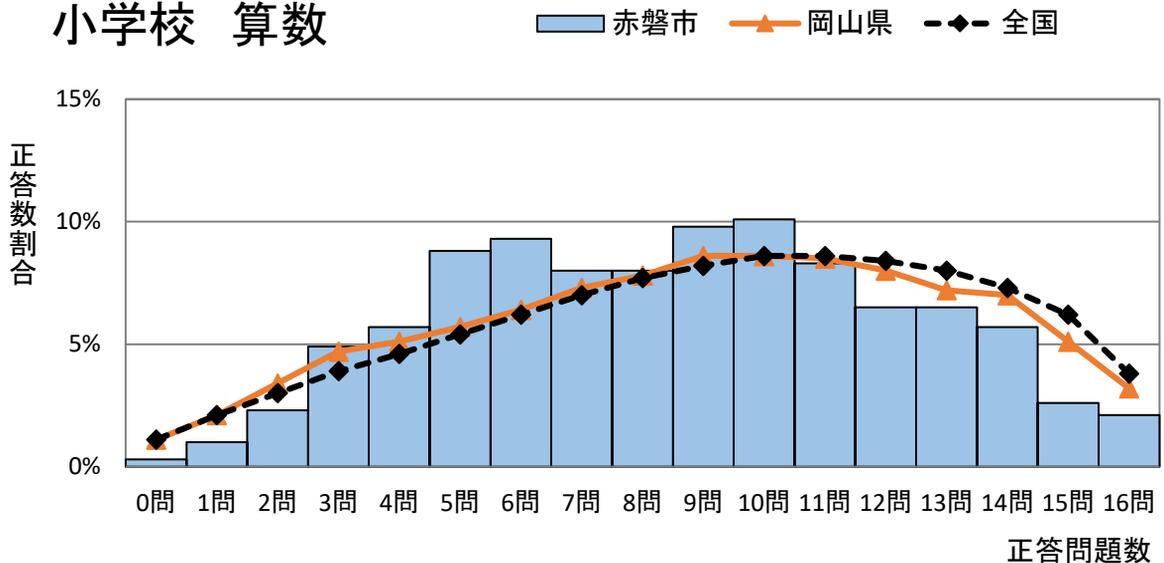
小学校6年生の学力調査結果から

【グラフの見方】
 横軸→正答問題数
 縦軸→児童生徒の正答数の割合
 を示しています。

小学校 国語

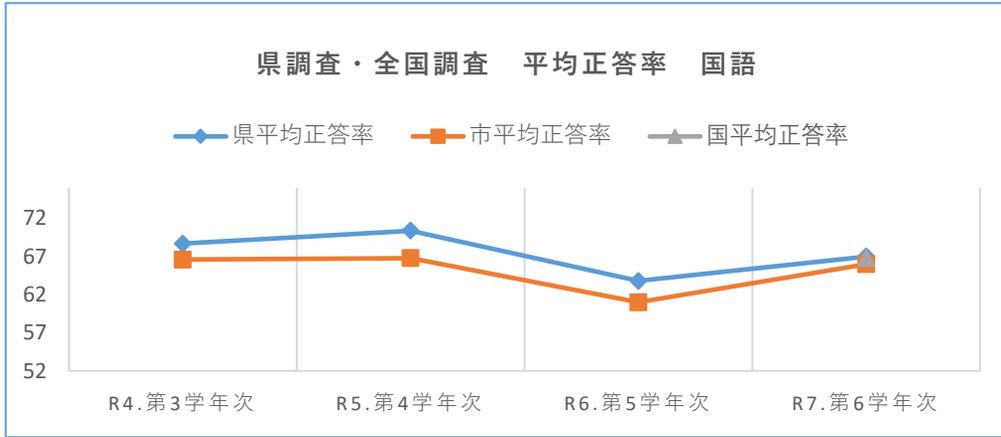


小学校 算数

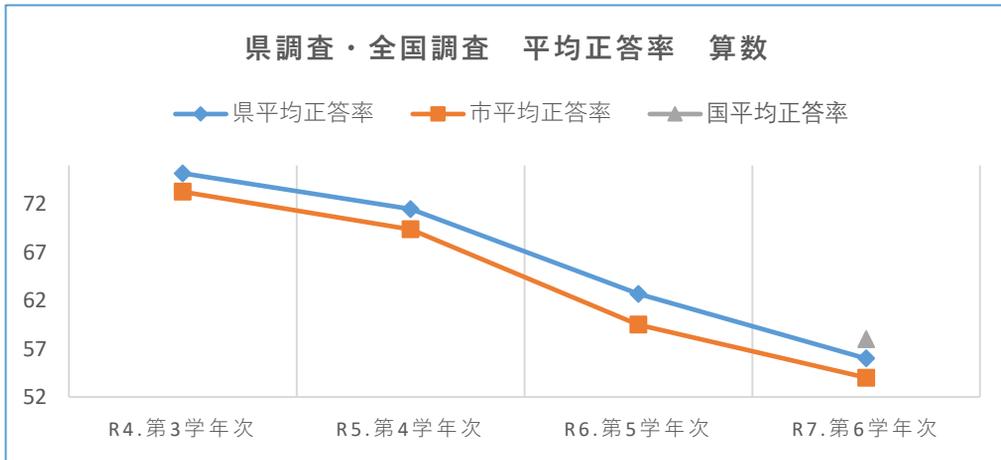


同一集団による経年比較により、改善と課題を明確に

令和7年度6年生における、3年次からの経年変化を岡山県の平均正答率と比較したものです。3年生から5年生までの平均正答率は「岡山県学力・学習状況調査」、6年生の平均正答率は「全国学力・学習状況調査」をそれぞれ用いています。



2020年度入学 (令和7年度6年生)					中央値
国語	R4.第3学年次	R5.第4学年次	R6.第5学年次	R7.第6学年次	R7全国調査
県平均正答率	68.7	70.4	63.8	67	10
市平均正答率	66.6	66.8	61.0	66	9
全国平均正答率				66.8	10



2020年度入学 (令和7年度6年生)					中央値
算数	R4.第3学年次	R5.第4学年次	R6.第5学年次	R7.第6学年次	R7全国調査
県平均正答率	75.2	71.5	62.7	56	9
市平均正答率	73.3	69.4	59.5	54	9
全国平均正答率				58	10

学力調査結果【小学校】

国語の概況

- ・平均正答率は県と比べて-1.0ポイント、全国と比べて-0.8ポイント、中央値は県及び全国と-1であるが、おおよそ全国平均と差は見られない。
- ・県や全国との平均正答率の差は3年次、4年次よりも縮まっている。

国語の改善点(○)と課題点(▲)

- 「書くこと」の領域については、4年次、5年次の県調査結果と比較して、平均正答率が県や全国と同等もしくは、設問によっては県や全国を上回り、改善傾向にある。
- ▲「読むこと」の領域については、4年次、5年次の県調査結果と比較すると依然として課題が残っている。

国語の結果に対する考察と授業改善等のポイント

- ・児童質問紙「国語の授業で、先生は、あなたの良いところや、前よりもできるようになったところはどこかを伝えてくれますか。」という項目について、県や全国と比べると肯定的な回答の割合が7ポイントほど高い。
- ・5年次からの正答率の改善は上記のような教師の児童に対する丁寧なフィードバックの効果も考えられる。
- ・「読むこと」の指導改善に向けては、説明文において、事実と感想、意見などの関係について教科書の本文や資料等に立ち返りながら、明確な理由をもって話し合う活動を行うことが考えられる。

算数の概況

- ・平均正答率は県と比べて-2ポイント、全国と比べて-4ポイント、中央値は県とは同じであるが全国と比べて低い状態である。
- ・県との平均正答率の差は5年次と比べると縮まっている。

算数の改善点(○)と課題点(▲)

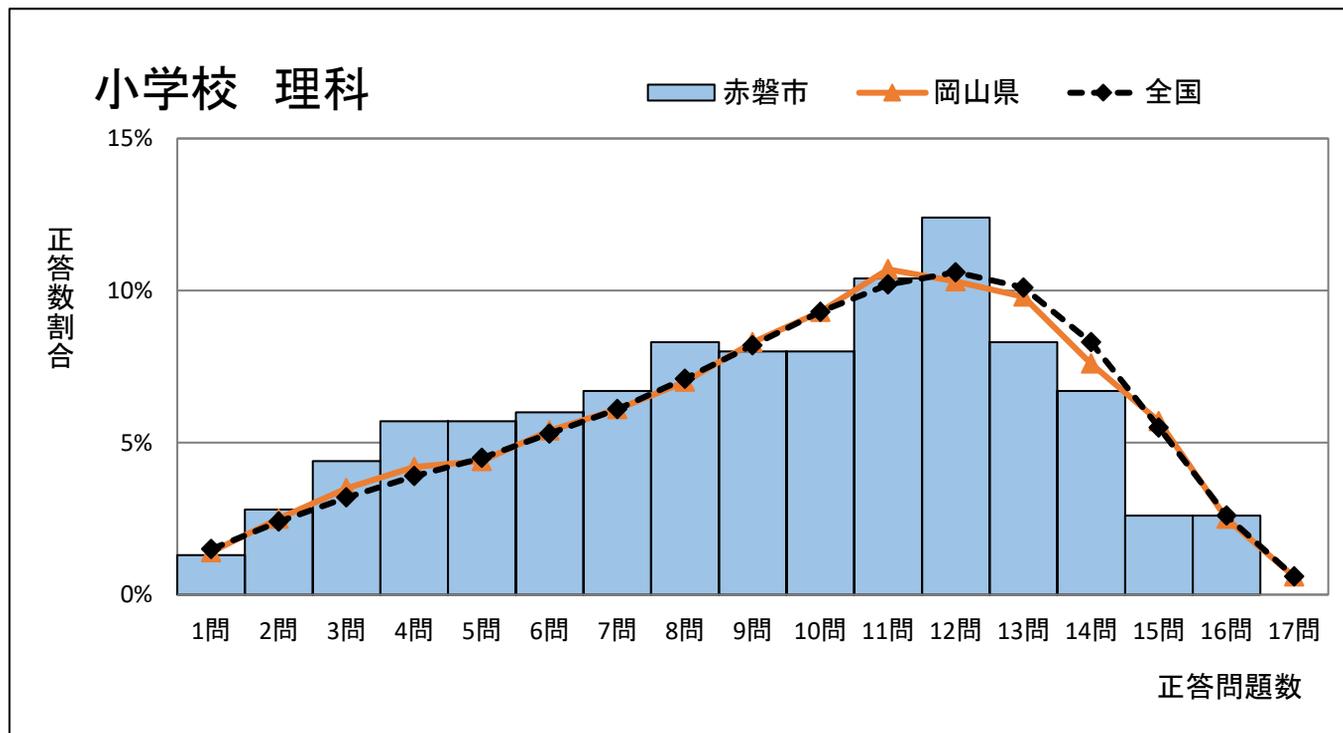
- 「数と計算」の領域では、計算に関する設問については正答率が比較的高く、4年次、5年次の傾向を維持している。
- ▲「数と計算」の領域について、小数や分数の意味理解について問われた設問について課題が見られる。

算数の結果に対する考察と授業改善等のポイント

- ・児童質問紙「算数の授業で、どのように考えたのかについて説明する活動をよく行っていますか。」という項目について肯定的な回答の割合が県や全国よりも低い。
- ・「数と計算」では、基礎基本の定着を図る指導の成果が表れていると考えられる。反面、小数や分数の意味理解や立式を行う場面で多様な意見を出し合い、説明し合う活動を通して自身が納得感をもって理解する指導を丁寧に行う必要がある。
- ・「図形」では、台形や平行四辺形の性質に対する理解の定着に課題が見られる。そのため、それらの性質を関連づけて面積を求める設問についても課題が見られる。授業改善に向けては、それぞれの図形の性質について具体物やICT等の操作や作図を通して説明し合う活動を行うにより理解の定着を図ることが考えられる。
- ・平均正答率が40%ほどの児童が多数いることが見て取れる。各校において、実態に即した個別の支援の手立てを行う必要がある。

令和7年度 小学校6年生理科の結果

理科については数年おきに行う調査であり、同一集団での経年変化を示すことができないため、本年度の結果のみをお示します。



<平均正答率(%)>

○赤磐市 54 ○岡山県 57 ○全国 57.1

理科の概況

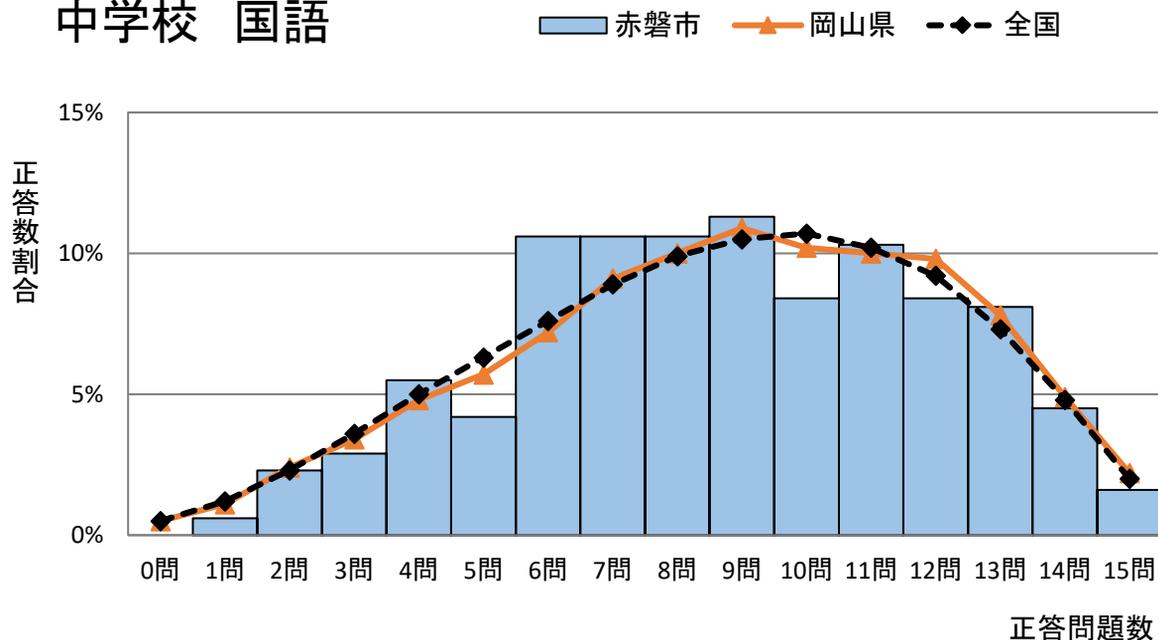
- ・「エネルギー」「粒子」「生命」「地球」のどの領域においても平均正答率が県や全国と比べ2ポイントから3ポイントほど低い状況にある。
- ・記述式の問題については、平均正答率が県や全国と比べ4ポイントから5ポイント低い。

理科の結果に対する考察と授業改善等のポイント

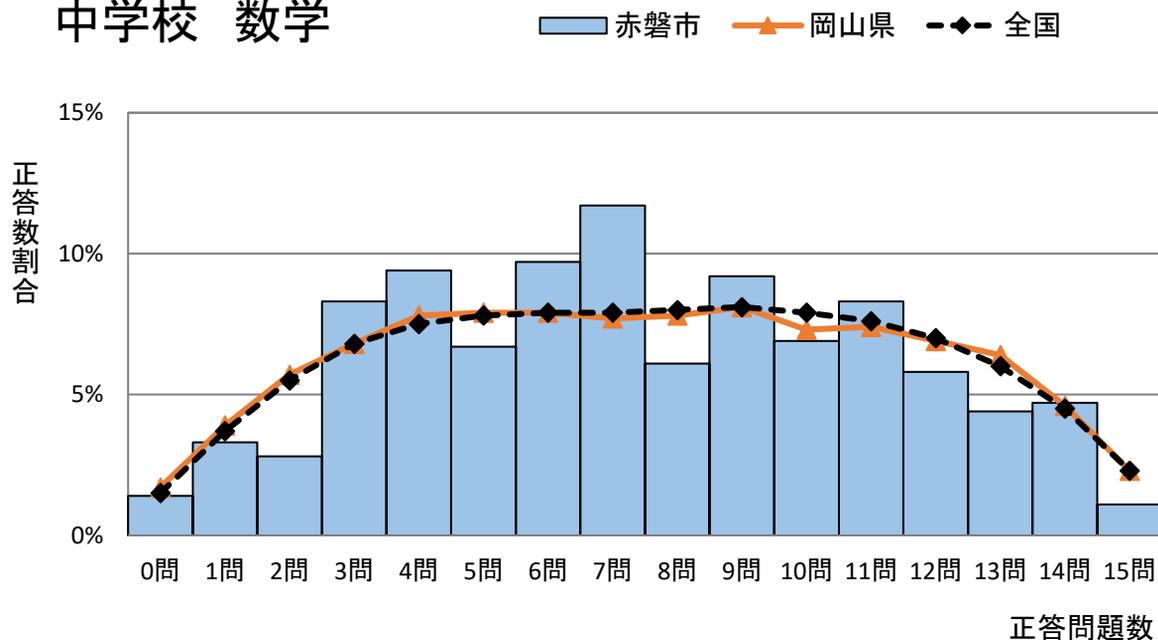
- ・児童質問紙「理科の勉強は得意ですか。」「理科の勉強は好きですか。」「理科の授業では、観察や実験をよく行っていますか。」という質問に対する肯定的な回答の割合は県や全国を上回っており、理科学習に対して楽しみや期待感を抱いている児童が多数いることがうかがえる。反面、「理科の授業で、観察や実験の結果から、どのようなことが分かったか考えていますか。」という質問については、肯定的な回答の割合が県や全国よりもやや低い。このことから、結果を考察し、結論を導く過程において、結果から何が言えるのかについて、表現する活動を充実させる必要があると考えられる。

中学校3年生の学力調査結果から

中学校 国語

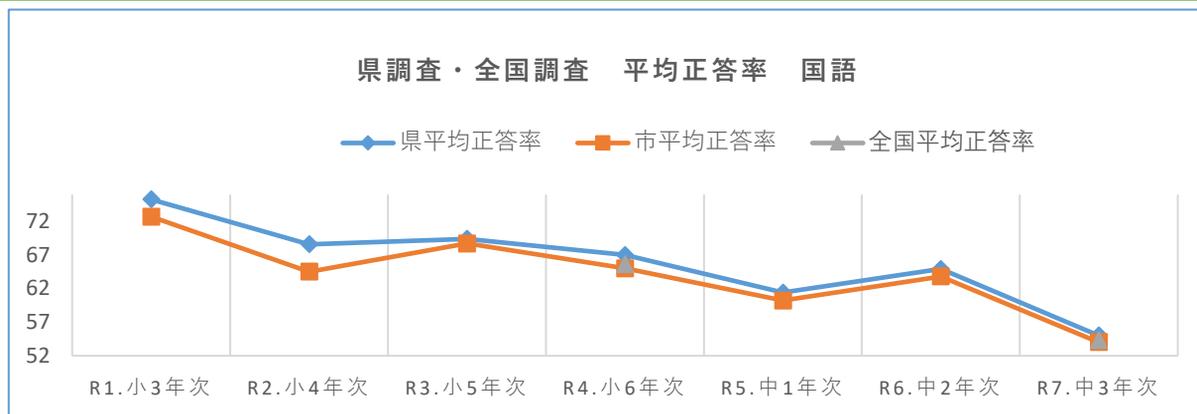


中学校 数学



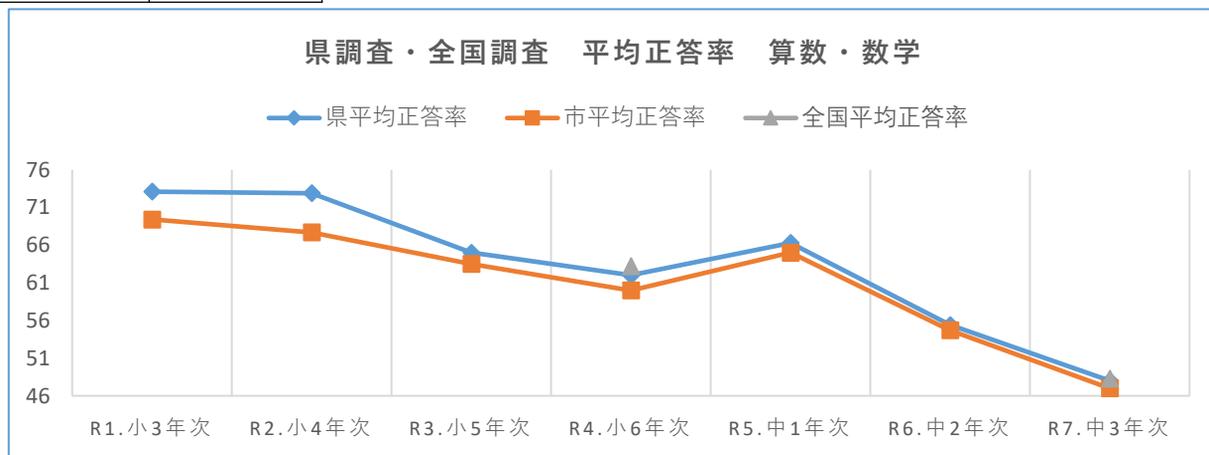
同一集団による経年比較により、改善と課題を明確に

令和7年度中学3年生の小学3年次からの経年変化を岡山県の平均正答率と比較したものです。3年生から5年生、中1、中2の平均正答率は「岡山県学力・学習状況調査」、6年生、中学3年生の平均正答率は「全国学力・学習状況調査」をそれぞれ用いています。



2017年度入学 令和7年度中学3年生							
国語	R1.小3年次	R2.小4年次	R3.小5年次	R4.小6年次	R5.中1年次	R6.中2年次	R7.中3年次
県平均正答率	75.3	68.6	69.4	67	61.4	64.9	55
市平均正答率	72.7	64.5	68.7	65	60.2	63.8	54
全国平均正答率				65.6			54.3

中央値	
	R7全国調査
岡山県	8
赤磐市	8
全国	8



2017年度入学 令和7年度中学3年生							
算数・数学	R1.小3年次	R2.小4年次	R3.小5年次	R4.小6年次	R5.中1年次	R6.中2年次	R7.中3年次
県平均正答率	73.1	72.9	65.0	62	66.3	55.4	48
市平均正答率	69.4	67.7	63.5	60	65.0	54.7	47
全国平均正答率				63.2			48.3

中央値	
	R7全国調査
岡山県	7
赤磐市	7
全国	7

学力調査結果【中学校】

国語の概況

- 平均正答率は県と比べて-1.0ポイント、全国と比べて-0.3ポイント、中央値は県及び全国と同じく8であり、全国や県の平均と差は見られない。

国語の改善点(○)と課題点(▲)

○領域ごとの平均正答率は、県や全国と差が見られない。

- ▲同一集団を領域ごとの正答率で見ると、「話すこと・聞くこと」の領域について、県と比べて正答率が低い傾向にある。

国語の結果に対する考察と授業改善等のポイント

- 領域ごとに平均正答率に県や全国と差が見られないことから、バランスよく資質能力が身に付いてきている様子を見て取ることができる。特に、小学校中学年段階と比較すると、平均正答率が徐々に県平均に近づいており、授業改善の成果が表れてきていると考えられる。
- 「話すこと・聞くこと」の領域については、「自分の考えをわかりやすく伝えるように表現すること」に課題が見られる。考えをわかりやすく伝える工夫を行う活動は、総合的な学習の時間などでも考えられる。その際に、国語科での学びを意識することにより、国語科での学習が他の学習に役立っている実感を得ることができ、そのことが学習の定着にもつながるものと考えられる。

数学の概況

- 平均正答率は県と比べて-1.0ポイント、全国と比べて-1.3ポイント、中央値は県や全国とは同じ状況である。
- 6年次以降、県、全国との差が改善傾向にある。

数学の改善点(○)と課題点(▲)

○どの領域においても、県や全国の平均正答率に近づいており、学力の定着の様子がうかがえる。

- ▲「図形」の領域は他の領域に比べて県や全国との差が見られる。

数学の結果に対する考察と授業改善等のポイント

- 小学校中学年以降、徐々に全国や県との差が縮まっており、授業改善の成果を見取ることができる。
- 同一集団の過去の学力調査の結果を見ると「図形」の領域についての課題は、小学校の時から見られる。指導と評価の一体化をめざした授業改善の必要性がある。
- 正答率40%以下の生徒も見られ、学習内容の積み上げに課題がある生徒がいると考えられる。各校において授業改善や個に応じた支援の在り方を検討する必要がある。

令和7年度 中学校3年生理科の結果

理科については数年おきに行う調査であり、同一集団での経年変化を示すことができないため、本年度の結果のみをお示しします。また、中学校理科では今年度、「IRT（項目反応理論）」を用いた調査を行っています。

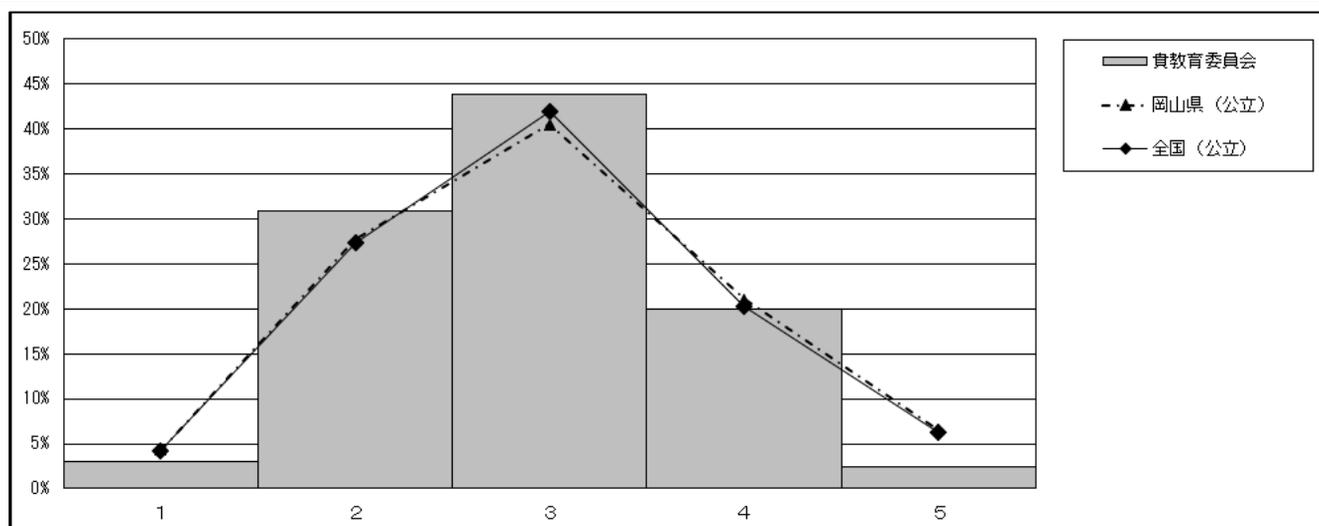
IRTを用いるメリットは以下の通りです。

- ①調査日の複数設定が可能になる。各児童生徒が異なる問題を解く設計にできる。
- ②今まで以上に多くの問題を使用し、幅広い領域・内容等での調査が可能になる。
- ③学力の経年変化を各教育委員会・学校でも把握できる

中学3年生理科 IRTバンド

<IRTバンドについて>

下グラフの横軸はバンドを示しています。3を基準として、5が最も高いバンドです。バンドは難易度の高い問題に正答していると高めに、難易度の低い問題に誤答していると低めに算出されます。縦軸は生徒の割合を示しています。



理科の概況

- ・バンド2、3の生徒の割合が全国や県と比べると高く、5の生徒の割合は低くなっている。比較的難易度の低い問題に誤答している生徒の割合が高く、難易度の高い問題に正答している生徒の割合が低いことがわかる。

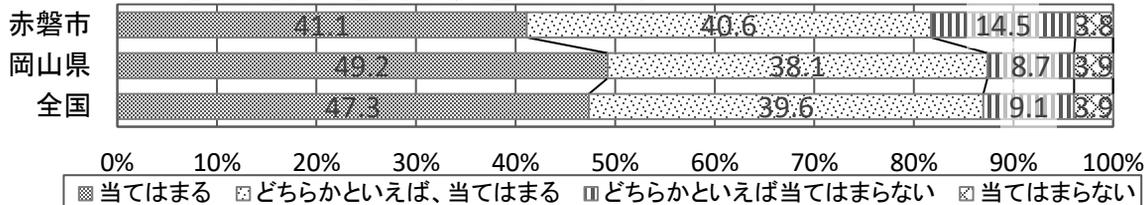
理科の結果に対する考察と授業改善等のポイント

- ・生徒質問紙「理科の授業では、観察や実験をよく行っていますか。」という質問に対する肯定的な回答の割合は、県や全国と比較すると7ポイントほど上回っており、教師が授業中、観察や実験を大切にし、生徒の興味関心を喚起しながら問題解決的な授業を構成していることがうかがえる。反面「理科の授業で学習した知識を普段の生活の中で活用できていますか。」「理科の授業で学習した考え方を普段の生活の中で活用できていますか。」等については、肯定的な回答の割合が県や全国を下回っている。導入部分やまとめ等で学習内容と日常生活とを関連付けるなどの工夫を充実することで、より、理科を学ぶ意義を実感したり、学習意欲の向上に繋がったりするものと考えられる。

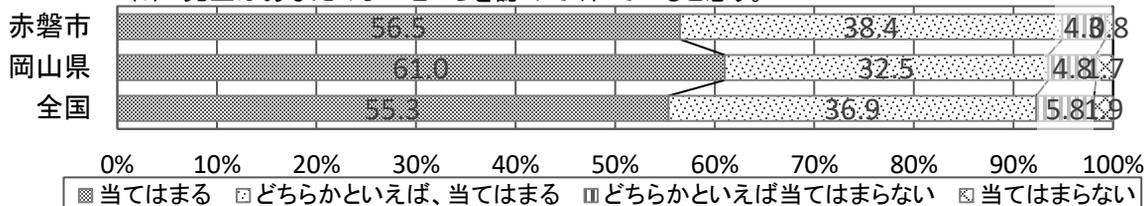
小学校6年生の学習状況調査結果から

学校において「安心」を感じている姿

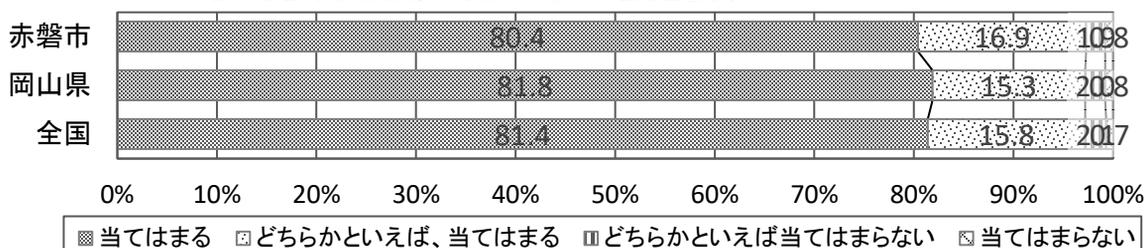
(5) 自分には、よいところがあると思いますか。



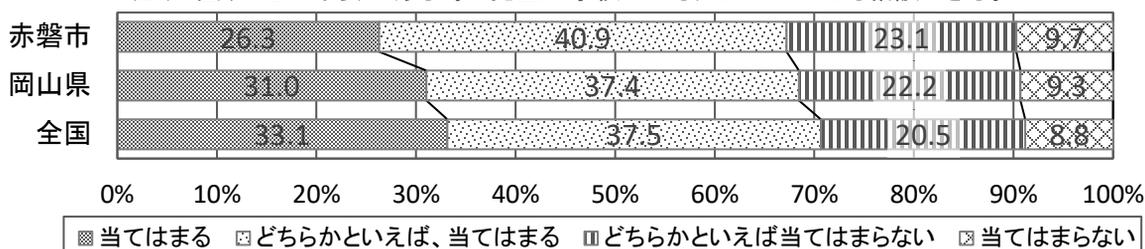
(6) 先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う。



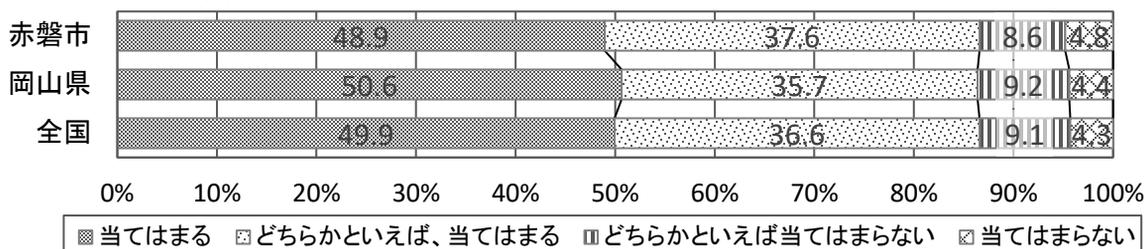
(9) いじめはどんな理由あってもいけないことだと思う。



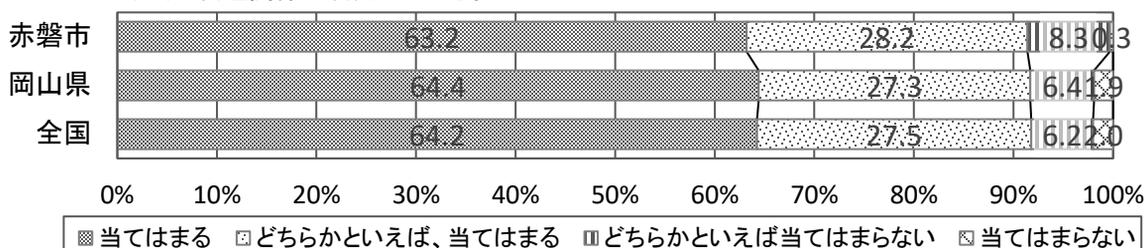
(10) 困りごとや不安がある時に先生や学校にいる大人にいつでも相談できる。



(12) 学校に行くのは楽しいと思う。



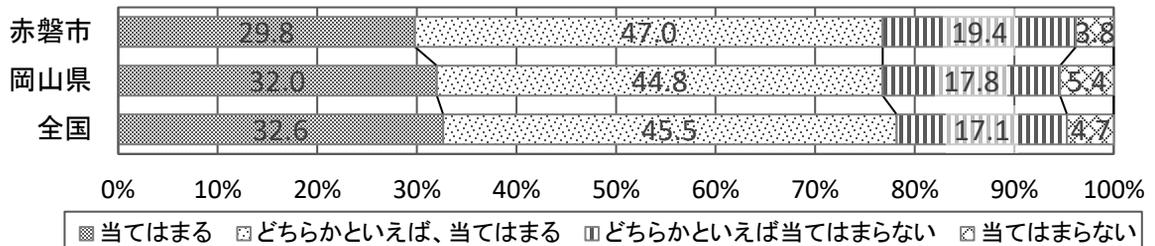
(14) 友達関係に満足している。



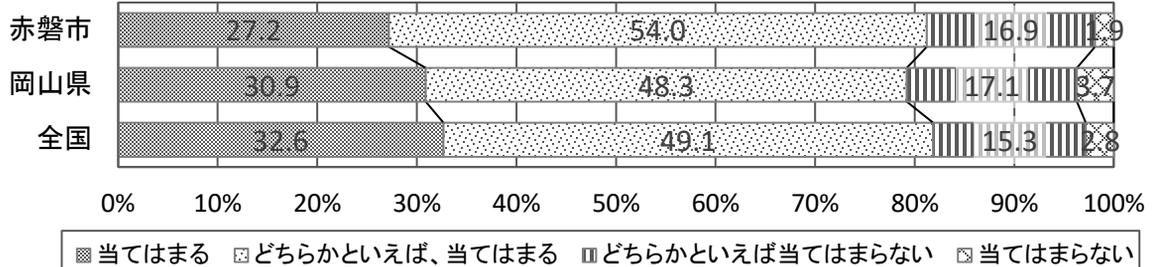
小学校6年生の学習状況調査結果から

自分の力を「発揮」しようとしている姿

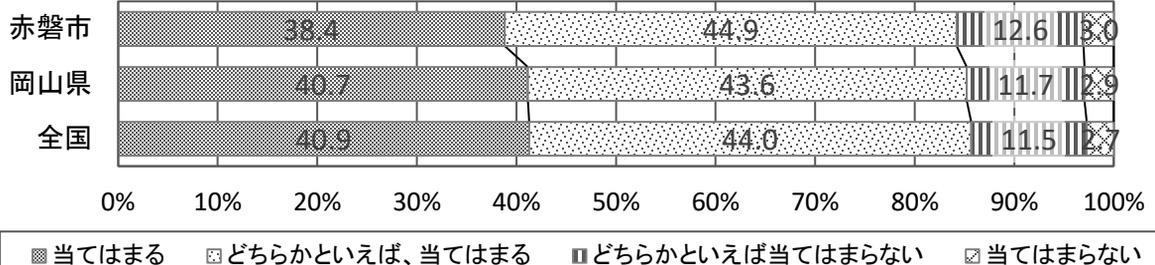
(13) 自分と違う意見について考えるのは楽しい。



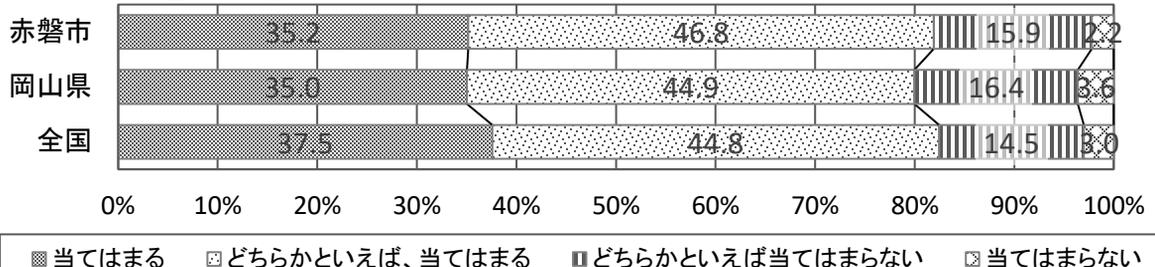
(16) 分らないことやわしく知りたいことがあったとき、自分で学び方を考え、工夫することができますか



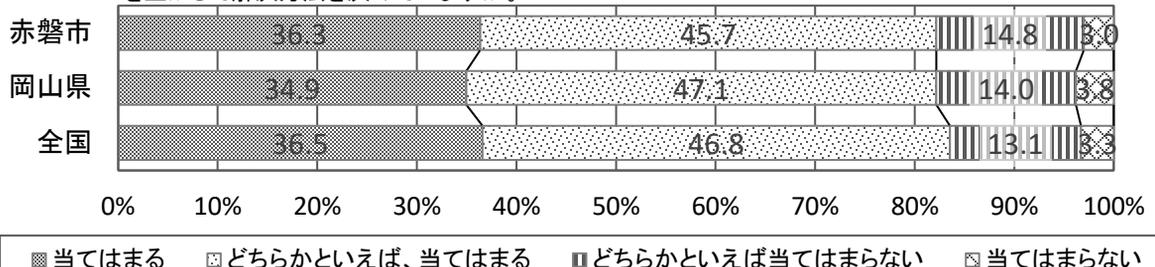
(35) 学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気づいたりすることができますか。



(40) 総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる。



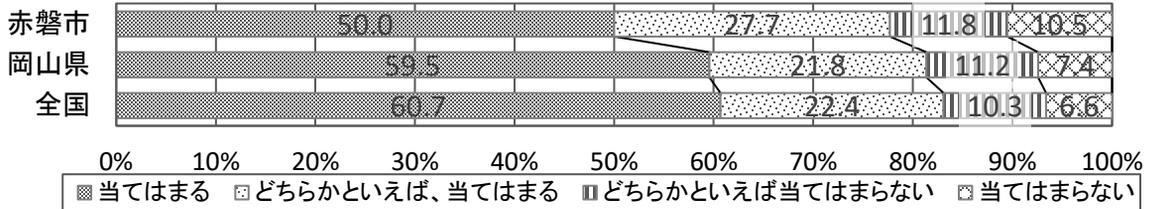
(41) あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていますか。



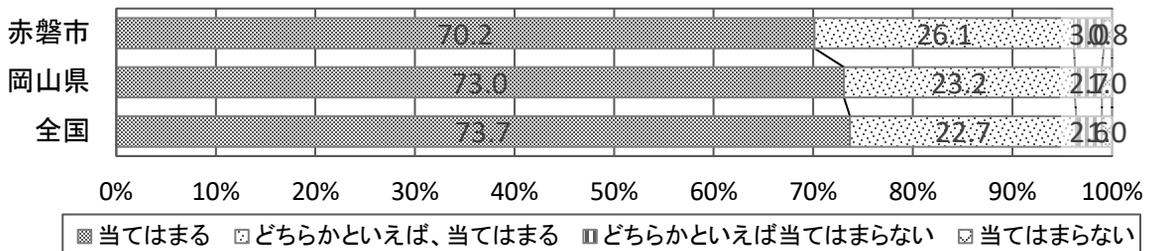
小学校6年生の学習状況調査結果から

「自立」に向かう姿

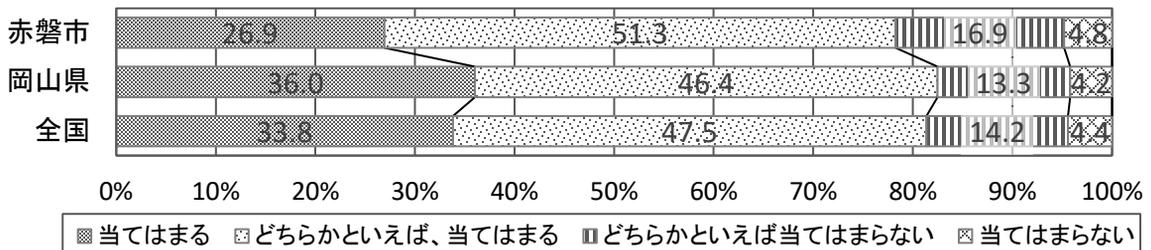
(7) 将来の夢や目標をもっている。



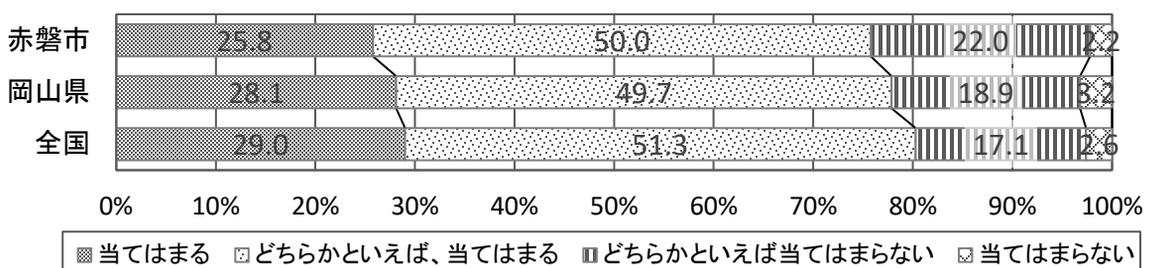
(11) 人の役に立つ人間になりたいと思う。



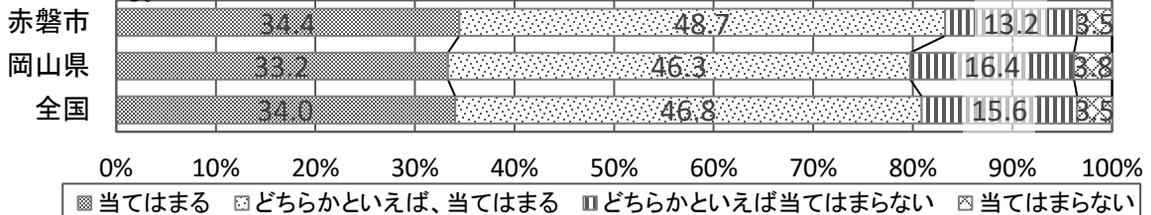
(27) 地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う。



(32) 授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んだ。



(42) 学級活動における学級での話し合いを生かして、今、自分が努力すべきことを決めて取り組んでいる。



「安心」「発揮」「自立」を育む学校・学級づくり

学習状況調査結果

学校教育課重点に示している「安心」「発揮」「自立」のそれぞれの様子について、児童生徒質問調査を通して考察します。

小学校の結果：学校において「安心」を感じている姿

- ・「自分には、よいところがあると思う。」「困りごとや不安がある時に先生や学校にいる大人にいつでも相談できる。」という質問に対し、肯定的な回答の割合は県や全国と比べ低い状況であった。
- ・「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う。」という質問に対しての肯定的回答は県を上回った。

小学校の結果：自分の力を「発揮」しようとする姿

- ・「自分と違う意見について考えるは楽しい。」「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気づいたりすることはできていますか。」という質問に対して、肯定的な回答の割合がやや低い。
- ・総合的な学習の時間についての質問では、肯定的な回答が県の割合を上回っている。

小学校の結果：「自立」に向かう姿

- ・「将来の夢や目標をもっている。」「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う。」という質問に対する肯定的な回答の割合が県や全国よりも低い状況にある。

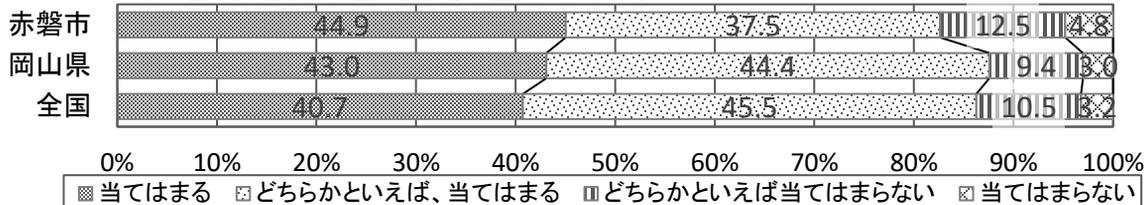
小学校の結果に対する考察

- ・児童質問紙「先生はあなたのよいところを認めてくれる。」については94.9%が肯定的な回答をしており、昨年度同様、県や全国を上回っており、赤磐市の特徴が表れている。教員の一人一人を大切にした学級経営の成果が感じられるとともに、児童は先生や友達と良好な関係性を築き、学校に行くことを楽しみにしている様子がうかがえる。
- ・総合的な学習の時間では、探究的なサイクルによる学習過程の中において、協働的に学習に取り組んでいるのに対し、他者との話し合いによって学びが深まっているという実感が低い。改善に向けては、自分の考えをアウトプットする場面を意図的に設定し、児童の考えの深まりを見取ってフィードバックするなど、児童自身が自身の学びの深まりを実感できるよう働きかける等の手立てが考えられる。
- ・「自立に向かう姿」の改善に向けて、総合的な学習の時間や特別活動を利用し、児童主体の課題解決を充実させることが考えられる。問題解決の過程において自分自身の学びを客観的に把握するための「振り返り」を適切に行うことにより、自身の学びをメタ認知できるとともに、次の学びに向けた自身の課題を自ら設定することができると考える。
- ・「学校において安心を感じている姿」については項目によっては、20%近くの児童が否定的な回答をしている。日常生活の中で担任だけではなく、複数の教員の目で児童の様子を見取ったり、教育相談等を利用して生活アンケートを行ったりするなど、引き続き誰もが安心できる学校、学級づくりを目指す必要がある。

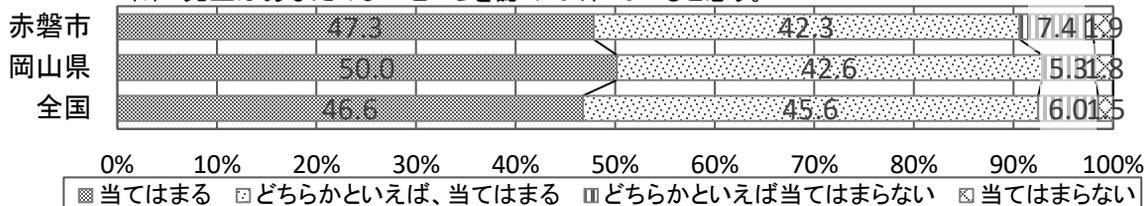
中学校3年生の学習状況調査結果から

学校において「安心」を感じている姿

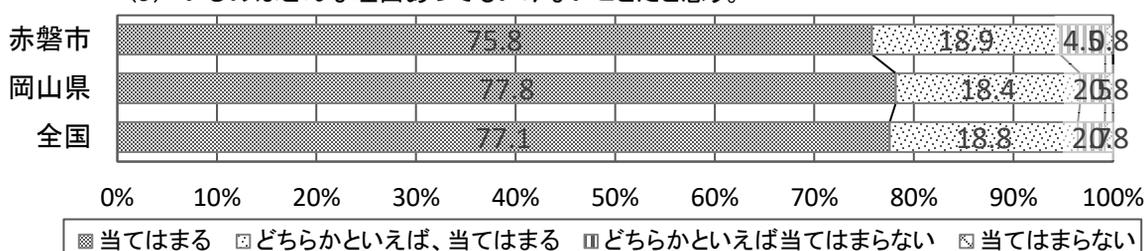
(5) 自分には、よいところがあると思いますか。



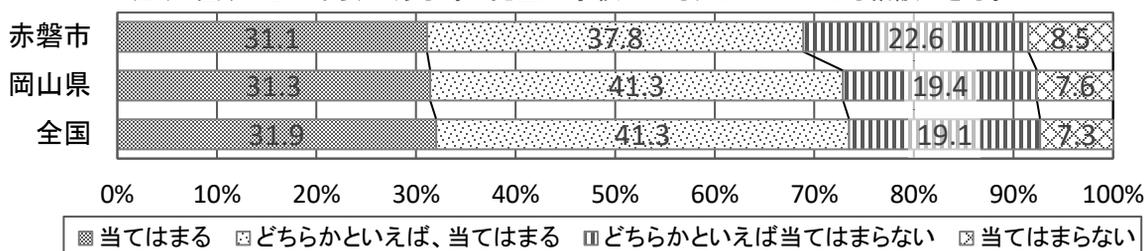
(6) 先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う。



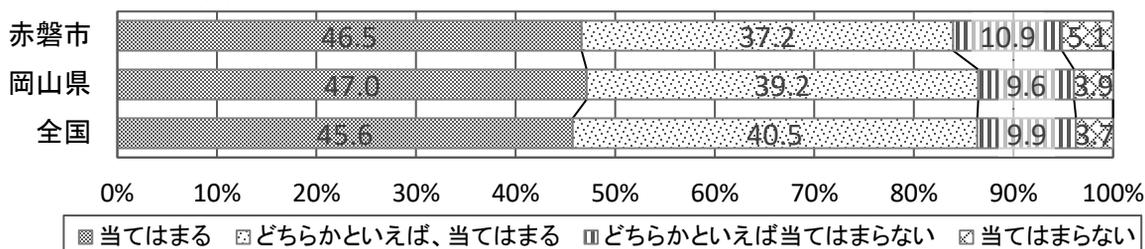
(9) いじめはどんな理由あってもいけないことだと思う。



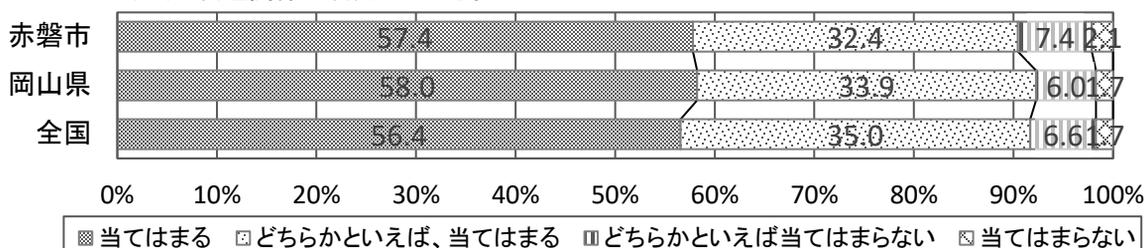
(10) 困りごとや不安がある時に先生や学校にいる大人にいつでも相談できる。



(12) 学校に行くのは楽しいと思う。



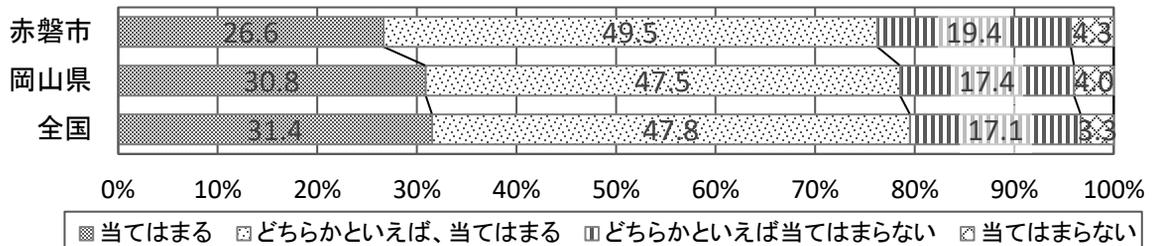
(14) 友達関係に満足している。



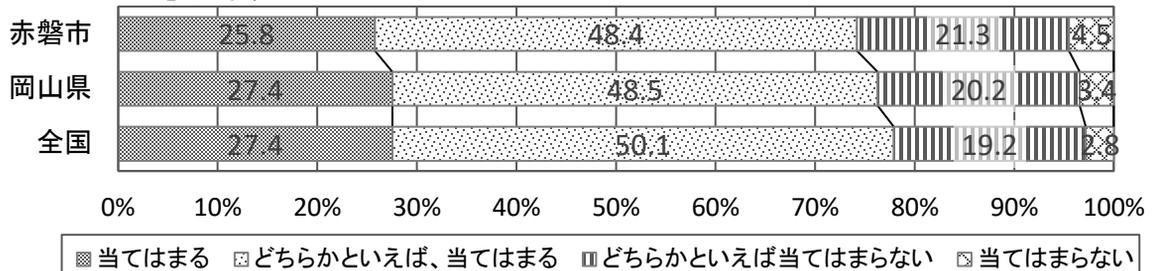
中学校3年生の学習状況調査結果から

自分の力を「発揮」しようとしている姿

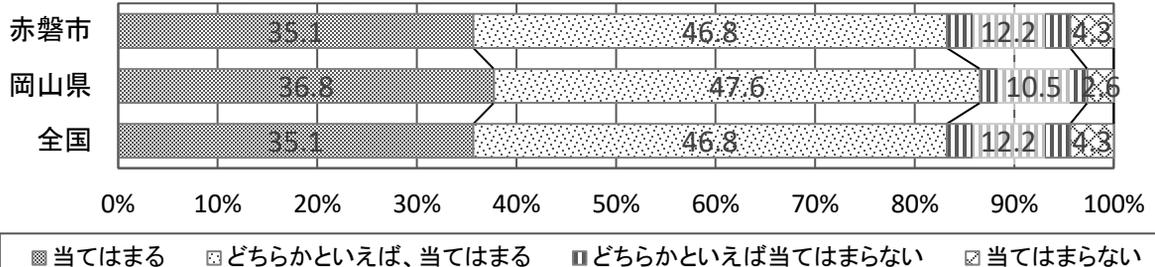
(13) 自分と違う意見について考えるのは楽しい。



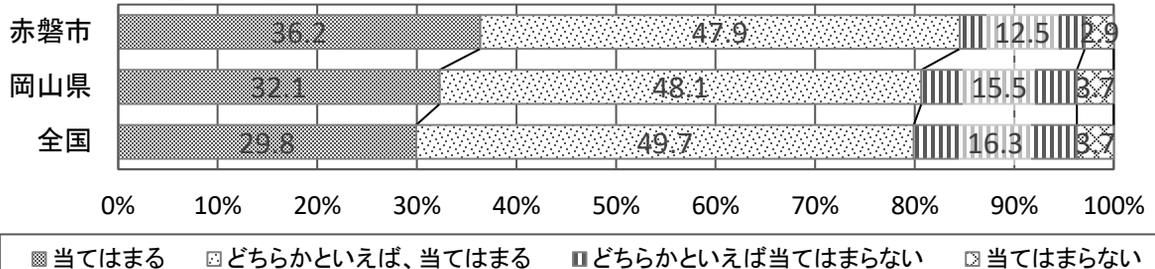
(16) 分らないことやわしく知りたいことがあったとき、自分で学び方を考え、工夫することができますか



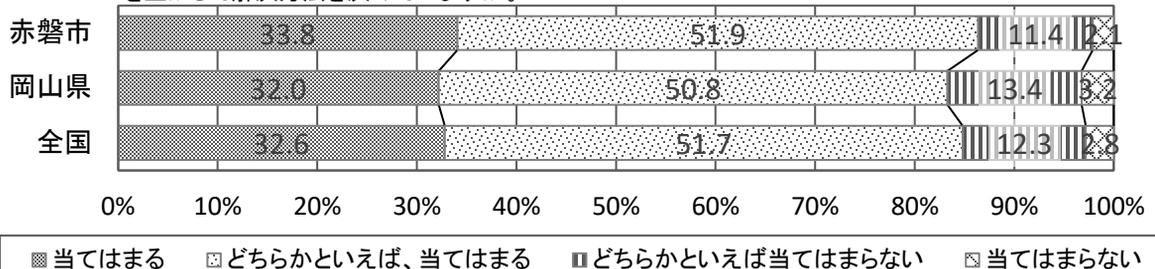
(35) 学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気づいたりすることができますか。



(40) 総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる。



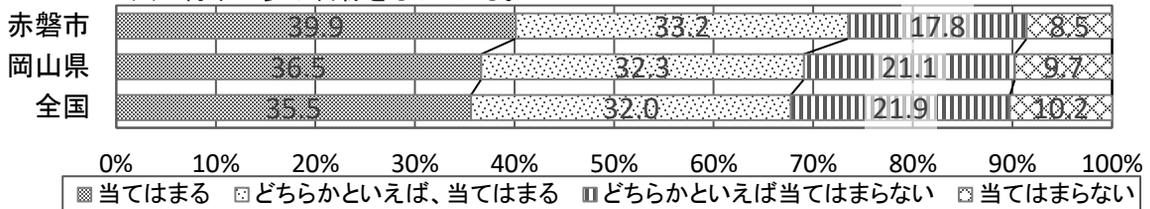
(41) あなたの学級では、学級生活をよりよくするために学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていますか。



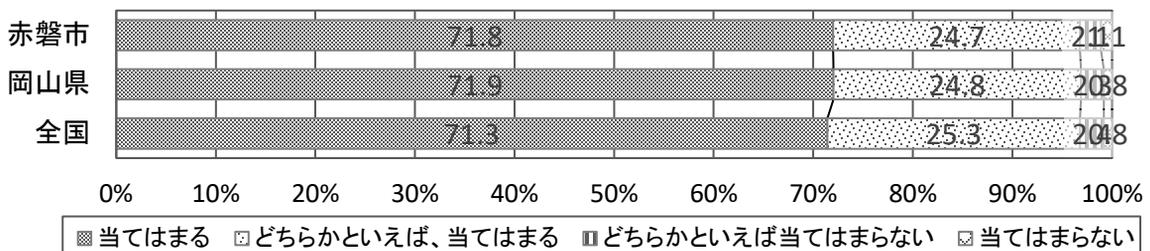
中学校3年生の学習状況調査結果から

「自立」に向かう姿

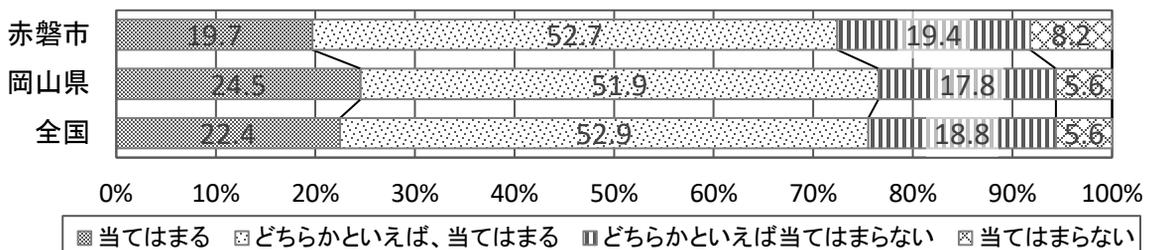
(7) 将来の夢や目標をもっている。



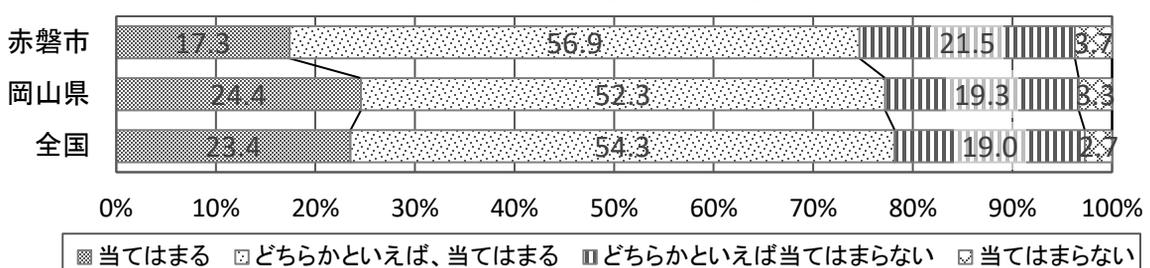
(11) 人の役に立つ人間になりたいと思う。



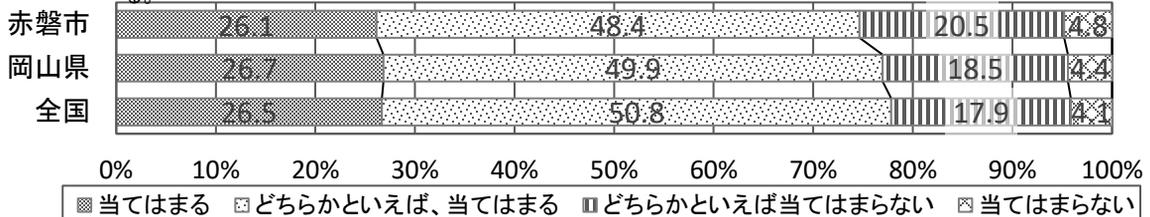
(27) 地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う。



(32) 授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んだ。



(42) 学級活動における学級での話し合いを生かして、今、自分が努力すべきことを決めて取り組んでいる。



「安心」「発揮」「自立」を育む学校・学級づくり

学習状況調査結果

中学校の結果：学校において「安心」を感じている姿

- ・「自分には、よいところがあると思いますか。」という質問については、「当てはまる」という回答が多い反面、「どちらかといえば当てはまらない」「当てはまらない」という否定的な回答も県や全国より多くなっている。この傾向は、他の項目でも同じような状況にある。

中学校の結果：自分の力を「発揮」しようとする姿

- ・「自分と違う意見について考えるのは楽しい。」「分からないことやくわしく知りたいことがあったとき、自分で学び方を考え、工夫することができていますか。」という質問に対しての肯定的な回答の割合は全国や県と比べて低い。
- ・「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる。」という質問については、県や全国を大きく上回っている。
- ・学級活動に関わる質問については、肯定的な回答の割合が全国や県と概ね同じような状況にある。

中学校の結果：「自立」に向かう姿

- ・「将来の夢や目標をもっている。」という質問に対する肯定的な回答の割合は県や全国を大きく上回っている。
- ・「人の役に立つ人間になりたい。」という項目については、県や全国と同じ傾向にある。

中学校の結果に対する考察

- ・「安心」に関わる質問項目について「当てはまる」という回答の割合が高い反面、「どちらかといえば当てはまらない」「当てはまらない」という否定的な回答の割合も全国や県と比べて高い状況にある。生徒一人一人の状況を多くの教員で共有し、家庭と連携を図りながら、安心できる環境を整備する必要がある。
- ・「人の役に立つ人間になりたい。」という質問に対しては、肯定的な回答の割合が96.5%と高い状況にある。また、研究調査※2によると、日本の若者の特徴として、「他者の役に立っている」という自己有用感が自尊感情につながる傾向があることが示されている。各校において、生徒主体の取組を大切にしている中で、自己有用感を感じ、このような意識が高まっていると考える。
- ・「将来の夢や目標をもっている。」という質問の「当てはまる」という回答は県や全国よりも5ポイントほど上回っている状況である。「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる。」という質問の肯定的回答割合の高さと重ねると、岡山型PBL※1など、探究的に問題解決に取り組む学習を積極的に行っており、その成果が表れていると考えられる。

児童・生徒質問調査と授業改善 今後に向けて【小中共通】

＜各教科と生活科・総合的な学習の時間の資質・能力、見方・考え方の往還＞

「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか。」という質問に対して、肯定的な回答を示している一方、「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組みましたか。」という質問についての肯定的な回答は、小学校では全国を下回っており、中学校では、県も全国も下回っている。

総合的な学習の時間では課題を自ら見出し、探究する授業が行われていることが見受けられる。総合的な学習の探究的な学びのサイクル（課題設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現）の中で、児童生徒は、各教科で培われた資質能力や各教科の見方・考え方を発揮していると考えられる。そのことを児童生徒が実感できるように働きかけることで、学習の意義を感じ、必要感をもつなどの学習意欲にもつながると考える。

さらに、総合的な学習の時間に培われる探究的な見方・考え方を働かせることで、より児童生徒の主体的な教科の学習が展開されるものと考えられる。

＜振り返りの充実＞

「学級の友達との間で話し合う活動を通して自分の考えを深めたり、新たな考え方に気づいたりした。」という質問に対して多くの児童生徒が肯定的な回答をしている。授業の中で、意見を交流し合う対話のある学びに向けて授業改善が進んでいることがうかがわれる。

一方、児童生徒、個々の状況に焦点を当てると、話し合っただけで気づいたことなどが、自分自身の力として定着しているとは限らないという結果も見受けられる。話し合い等で得られた学びをより自分の力として定着させるために、振り返りを充実させることが必要であると考えられる。

授業の終末に「振り返り」の時間を充実させ、「何が分かったか。」「何ができるようになったか。」「自分の学びの方法や手順はどうであったか。」などと、自分自身を客観的に振り返ることを通して、学びを定着させたり、自身の学習を調整したりできると考える。

＜ICTの利活用＞

「授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用したか。」を問う質問に対し、ほぼ毎日と回答している割合は、小学校で県と比べ7ポイント、全国と比べ+4ポイントであった。中学校では、県と比べ30ポイント、全国と比べ25ポイントであった。

情報を集め整理して、調べたことを発表する学習活動に取り組む、総合的な学習の時間はICTと親和性が高い。赤磐市では総合的な学習の時間を積極的に取り組んでいる反面、ICTの活用頻度が低い。児童生徒の自己決定のもとICTを効果的に活用することで、さらなる探究的な学びの充実につながると考えられる。

教育委員会の取組

教育委員会として、改善点や課題点をもとに、次のような事業、取組を行い、児童生徒の学力の向上を図る。

<学校改革・授業改善>

- ・赤磐市研究指定校事業 市内2校・1ブロック
各校の主体的な研究をサポートし、成果を幼稚園、小中学校共有する。
- ・各種授業研修会 年間10回
授業づくり研修会、ICT授業活用研修会、特別支援教育授業づくり研修会を開催し、教員の指導力向上を図る。
- ・中学校ブロック研修会
中学校ブロックごとに児童生徒や学習の状況を共有し、指導に生かす。
- ・指導訪問
指導主事が各校へ訪問し、授業についての指導助言を行う。

<個に応じた支援>

- ・各種人員配置により、落ち着いた学習環境づくり・個に応じた指導を充実させ、学力向上を図る。
 - 非常勤講師、学習支援員、特別支援教育支援員による個別の学習支援
 - 大学生による学習支援ボランティア
 - 補充学習支援員により、長期休業中や放課後、朝の活動等で学習支援を行う。

<架け橋プログラム>

- ・幼児教育と小学校教育の学びのより良い接続を模索する。

<コミュニティ・スクール>

- ・地域と学校とが協働して子どもたちの成長を支える仕組みを構築する。

参考

・耳塚寛明(2021)「学力格差への処方箋」勁草書房

※1・岡山型PBLガイドブック(2023)岡山県教育委員会

※2・こども家庭庁長官官房参事官(令和5年度)「我が国と諸外国のこどもと若者の意識に関する調査」

・ジョン・ハッティ(2017)「学習に何が最も効果的か メタ分析による学習の可視化」あいり出版

・ジョン・ハッティ / シャーリー・クラーク(2023)「教育の効果:フィードバック編」法律文化社

・中山芳一(2020)「自分と相手の非認知能力を伸ばすコツ」東京書籍

・小学校学習指導要領 中学校学習指導要領

・国立教育政策研究所「令和7年度全国学力・学習状況調査 解説資料」

・嶋野道弘/青木芳弘/齋藤博伸(2024)「授業は変えられる」東洋館出版社

※「岡山型PBL」・・・PBLの考え方を踏まえ、学習内容に応じて「自己決定の場を設ける」「振り返りを重視する」「地域の多様な『人・もの・こと』と関わる」3点を大切にするとともに、「夢育」で重視している非認知能力の育成も意識しながら、各教科等や総合的な学習の時間、特別活動の目標に示す、資質・能力を身につける学習方法です。

PBL(Project Based Learning)・・・児童生徒が自ら課題を見つけ、その課題を自ら解決する過程を通して、課題解決に必要な資質・能力を身に付ける学習方法のことで、「課題解決学習」ともいわれる。